

日本フェアプレイ大賞 2022 大賞作品

学校名(一般応募)	東京都立大泉高等学校附属中学校 2年
名前	麻生真愛 (あそう まな)
タイトル	他人を思いやる心

私は体操を習っていた。そこで一緒に切磋琢磨していた、裕ちゃんについて話そうと思う。私と裕ちゃんは同時期に体操教室に入った仲間でもあり、ライバルでもあり、親友でもあった。体操教室では基本的な体の動かし方を教わるだけでなく、毎月1回だけ、スポーツテストがあり、私と裕ちゃんはほとんど同じスピードで級を上げていった。

いつしかどちらが先により高い級を取れるか、競い合う程になっていた。級は10級から1級まであり、10段階あるのだが私と裕ちゃんはほぼ同時期に2級まで取り終え、1級をどちらが先に取得できるか、勝負をしていた。しかし互いに1級をとるために必要な技をなかなか習得できず、日々練習に勤しんでいた。負けず嫌いな私はどうしても裕ちゃんより先に習得したい気持ちが大きく、コーチにこっそりとコツを聞きに行った。コーチの助言を元に練習をすると、技の精度が上がってきた。ある日、私が一人で練習をしていると裕ちゃんが駆け寄ってきて、この動画なんだけど一緒に見ない？とその技のコツの解説動画を私に見せてくれた。私はドキリとした。私はコーチから教わったコツを独り占めしていたのに裕ちゃんは私のためを思ってわざわざ自分はなんの得もしないのに見せてくれたのか、と。私はそのときライバルについて誤解していたことに気が付いた。ライバルはどちらかが優れていれば良いのではなく互いに助言をしあって初めてライバルだといえるということに。そこから私は裕ちゃんと互いに切磋琢磨しあい、無事1級を取得することが出来た。これこそ他人を思い、同じ土俵に立つからこそ芽生えるフェアプレーの精神なのだと感じた。

日本フェアプレイ大賞 2022 審査員特別賞作品

学校名	羽曳野市立高鷺北小学校 6 年
名前	中野初音 (なかの はつね)
タイトル	たたえあう世界へ

私がフェアプレイを感じたのは、今年開催された、「東京2020オリンピック」のスケートボード競技です。15 歳の岡本碧優さんは演技中に転倒してしまい、メダルを獲得できなかったのですが、演技後にオーストラリアやアメリカのライバルたちが肩に岡本さんを乗せ、称賛していました。

フェアプレイだと感じた理由は、ライバル一人一人が岡本さんをリスペクトしているからこそ、できる行動だなと思ったからです。ライバル同士だと、勝ち負けにこだわってしまいがちだけど、この選手たちは結果に関係なく互いのパフォーマンスを称賛し合っていました。ここで、ふだんの生活についても考えてみると、スポーツの世界や勉強では勝ち負けの結果が重要視されることが多いと感じています。例えば運動会の競争の順位や受験の場があげられます。競いあって高いレベルを目指すことはもちろん大切です。ですが、たとえ負けたり思うような結果にならなかったとしてもくやしい気持ちだけでなく、自分やみんなのがんばりを認め合うことで、お互いがフェアな心を持つことができるのではないのでしょうか。

これから、中学生になり、クラブやテストなどで、競い合うことが増えると思います。競い合いながらも仲間を大切に、思いやる、そしてフェアプレイの広い心をもつことのできる人間になりたいと思います。

日本フェアプレイ大賞 2022 審査員特別賞作品

学校名	久喜市立久喜東中学校 2年
名前	石田心結 (いしだ みゆ)
タイトル	試合での友情

私は小学4年生頃から空手を習っていて、年に3、4回は大会に仲間とともに出ている。

これは、2年前の関東大会での出来事だ。

小学校5、6年の形の部に、私と数人の仲間は出場していた。私たちにとって、全国大会の次に大きな試合で、有名な道場から地方の小さな道場まで、大勢の生徒が参加していた。

見わたすと黒帯ばかりのコートでおどおどする私に、声をかけてくれた女の子がいた。

「ねえ、あなたは何の形が得意？」

名前も道場も知らない、小柄な、笑顔の素敵な女の子だった。彼女は私より年下だったが、段も形の技術もずっと上で、数多くの大会に出場する様な選手だ。トーナメント戦でトップバッターの私は、緊張とプレッシャーでかなり体も固くなっていたため、彼女と話したり、アップしたりが効いたのだろう。一回戦目は無事に勝ち進むことができた。

「心結ちゃん、とっても上手だった！堂々としていて気合も大きかったよ！」

「わあ、ありがとう！でもまだまだだよ。」

私と彼女はすっかり打ち解け、互いに褒め合い、アドバイスし合う仲になっていた。

しかし、二回戦目の対戦相手は、他の誰でもない。彼女だった。私の今の実力では、勝つことはできないだろう。心の中では半分諦めていた私は、彼女にこんな言葉をかけた。

「Aちゃん、私の分まで決勝に行ってね。」

彼女からは想像もしない言葉が返ってきた。

「何言ってるの！？まだ試合は始まってないじゃない。もし勝てないと思っても、全力で戦おうよ！それが武道だよ！」

私はハツとした。そうだ、お互い本気で試合にいどむこと。それこそが礼儀であり、スポーツマンシップなのだ。

結果は敗退だったが、不思議と心は晴れていた。彼女とは、あの試合以来会えていない。でも、次会う時はお互い強くなろう、と約束した。私は彼女の姿と言葉を思い浮かべながら、今日もけいこにはげむ。